

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 18 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2016

課題番号：23520534

研究課題名(和文)日英バイリンガル児のコードスイッチングの言語分析 通時的研究

研究課題名(英文)A structural analysis of Japanese-English bilingual children's code-switching : a longitudinal study

研究代表者

難波 和彦 (NAMBA, Kazuhiko)

京都産業大学・外国語学部・教授

研究者番号：10550585

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日英バランスバイリンガルが自然な環境で行うコードスイッチング(CS)のデータを、文法構造面に加えて語用論的な側面からも、分析をしたものである。バイリンガル児のケーススタディからの縦断的なCSデータと、国際高校の生徒の横断的CSデータが、使われた。

コードスイッチングの起こった節は、Muyskenの分類法により、挿入、交替、融合の3パターンに判別され、そこにHallidayの機能文法の対人的機能、テキスト形成的機能からの分析も行われた。同じ節の中で、違った言語には、違ったメタ機能がわりあてられていることがわかった。

研究成果の概要(英文)： This study looks at Japanese-English balanced bilinguals' naturalistic code-switching data from a grammatical and pragmatic perspective. Code-switching data collected in a case-study of bilingual siblings' and in a cross-sectional study of international high school students were used.

The code-switched clauses were examined using Muysken's categories, i.e. insertion, alternation and congruent lexicalisation. They were also analyzed with Halliday's Systemic Functional Linguistics and explained from the perspectives of interpersonal and textual meta-functions. It was identified that in the same clause different languages were allocated different meta-functions

研究分野：バイリンガリズム

キーワード：コードスイッチング 選択体系機能言語学 バイリンガリズム

### 1. 研究開始当初の背景

(1) バイリンガルが、一連の発言の中で、2言語を切り替えながら話をする現象、コードスイッチングの研究は、1980年代より海外では盛んになってきたが、国内での研究例は少なく、とくに文法構造面に焦点をあてた研究は、西村(1997)、東(1993)、高木(2000)、難波(2009)などに限られている。

英語と日本語という言語類型学的に距離のある言語同士のコードスイッチングは、二つの言語の文法が、相互にどのような影響を与えあっているのか、興味深い知見を提供してくれるものであると予想できる。しかし、日本では多言語政策をとっているわけではなく、自然な言語環境のもとでのコードスイッチングのデータを収集することは、容易ではない。

(2) コードスイッチングの文法構造面の分析には、様々な言語の組み合わせを元に構築された Muysken (2000) の 3 つのカテゴリー insertion (挿入)、alternation (交替)、congruent lexicalization (融合-訳は研究者による) を設定する Bilingual Speech モデルや、その中の insertion パターンの分析に有効な言語産出の理論を元に考案された Myers-Scotton の MLF モデルと 4M モデル(2002)、などが強い影響力を持っている。社会言語学的、語用論的要素の影響も受けるコードスイッチングという現象を分析するには、さらなるツールが必要だと考えられる。

(3) Namba (2008) の PhD 論文では、二人のバイリンガル児の縦断的データを元にして、上記 MLF モデルを中心に Bilingual Speech モデルも使った分析をした。

さらに Wray (2002) の Formulaic Language (定式表現-イディオム・コロケーションなど複数の語が塊として脳に貯蔵され、そのまま使用されるもの) モデルからの分析も行われ、Formulaic Language の内側では、コードスイッチングは起こらないことが実証された。insertion パターンのコードスイッチングは、MLF モデルで説明ができるが、alternation、congruent lexicalization のパターンの例では、さらに別の説明方法が必要であると示唆された。

(4) 上記の縦断的データは一組のケーススタディであるので、質的研究として詳細な記述はできるが、そこから得た結果を一般化するには、横断的データの収集も必要である。

自然な環境での横断的データの収集を目的に、2009-2010 の科研費研究活動スタート支援では、日本では希少な国際学校(インターナショナルスクールと、帰国生受け入れのための学校のデュアルスクール)の生徒たちから、会話のデータを収集した。ふだんから生活の中で、コードスイッチングを使用している場面で、バランスバイリンガル同士の 3 人のフォーカスグループを作り、約 1 時間話をしてもらい、自然な状態でのコードスイッチングデータを収集することができた。

### 2. 研究の目的

(1) 日英バイリンガル児の 2 言語の発達の中でコードスイッチングのパターンが、どのように変わっていくのかについて明らかにする。上記の Muysken (2000) の 3 つのタイプを軸にして、語彙・文法面からのアプローチに、語用論的、心理言語学的なアプローチを統合して、より確固としたモデルの構築を目指す。縦断的研究によって得られたデータを中心に分析をするが、横断的データによって得られたデータも必要に応じて使われる。

(2) 新しいモデルの構築のために、Halliday & Matthiessen (2013) の Systemic Functional Linguistics (選択体系機能文法) を使った分析を試みる。この研究によって、日英のみならず、様々な言語間のコードスイッチングの構造面についての理解が深まるようなモデルが構築され、ひいては言語というもののそのものについての洞察が深まることを目指していく。

### 3. 研究の方法

すでにこれまでの研究で得られた録音データである、Namba (2008) の日英バイリンガル兄弟のケーススタディの縦断的データから、まだ書き起こしをしていない部分について、さらに書き起こしを進めた。

また、2009 年から 2011 年にかけての研究活動スタート支援「日英バイリンガル生徒のコードスイッチング：文法構造面からの横断的研究」から得られた書き起こし資料と合わせて、データベース化した。

書き起こしに関しては、日本語と英語のバランスのとれた研究協力者を雇用し、文字化された資料をもとに、会話文の中の節単位で、insertion, alternation, congruent lexicalization の分類を行った。ML(母体言語-文法的枠組みとなっている方の言語)に EL(埋め込み言語-挿入されている方の言語)が挿入される insertion のパターンの場合は、どういう語や形態素が EL となっているのかを 4M モデルに基づき分類した。4M モデルでは、内容語・意味を持つ形態素・連結の役目をする形態素・文法役割を持つ形態素の 4 つの形態素を設定し、前者のほうが出現しやすく、後者になるほど出現しにくいと考えられる。

alternation では ML そのものが、節の途中であっても切り替わっているパターンで、congruent lexicalization は、ML が 2 言語の融合された状態でできているパターンなので、上記の 4M モデルなどは適用しない。社会言語学的、語用論的観点からの分析、Formulaic Language や言語習得の上の面からの心理言語学的観点からの分析も行った。

語用論的な分析には、節を Systemic Functional Linguistics の分類法を使ってタグ付けをしていく。SFL では、節(clause)を経験

的意味機能 (experiential metafunction), 対人的機能 (interpersonal metafunction), テキスト形成的機能 (textual function) という3層のメタ機能の観点から、分析していくが、対人的機能、テキスト形成的機能の分析では、語用論、談話構造などの観点が用いられた。

#### 4. 研究成果

(1) Muysken の3つのカテゴリーのうち、insertion については、Namba (2009) などで、すでに MLF モデルを用いた分析を行ったが、そこで説明のできない、alternation と congruent lexicalization について、バイリンガル児の通時的データからの分析を行い、IJBE (International Journal of Bilingual Education and Bilingualism) でジャーナル記事として発表をした (Namba 2012)。

コードスイッチングが起こっている節に注目をして分析をしたが、it's で始まって日本語が続く、日本語の節の途中で is が使われるといった、特異な例が現れ、ここでは、英語が語用論的なフレームを作り、日本語が情報・意味内容を伝える、というように両言語が、機能の分担を行っていることがわかった。この研究から、機能的な面にさらに焦点をあてることが示唆された。

(2) 上記の2012年の記事で示唆されたように、語用論などの機能に焦点をあてた分析方法をさらに進めていく必要性が生まれ、開始当初にひとつの選択肢とあげていた、コードスイッチングの構造面の分析方法としては先例のない Systemic Functional Linguistics を用いた分析を実際に開始した。2013年のシンガポールでの ISB (International Symposium on Bilingualism) での発表、2014年のプリズベンでの AILA (International Association of Applied Linguistics)、国内での JASFL (日本機能言語学会) での発表、などを通じて、語用論に焦点をあてた対人的機能、談話マーカーなどに焦点をあてたテキスト形成的機能の部分に注目をした。2009-2011年の研究生活スタートアップで得られたバイリンガル高校生の横断的データを主に使い、これまでの文法構造的な分析では説明がしにくかったパターンについての分析を行った。

具体的には次のようなパターンがよく見られた。英語で始まった節において、交替 (alternation) が起こり、対人的機能の主要部分を担う叙法部 (Mood) が、すでに英語ではあるのに、日本語でも繰り返されるパターン。テキスト形成機能の主要部である主題 (Theme) を日本語が担い、題述 (Rheme) の部分を英語が担うパターン。文法面から CS を見るときに設定をする ML (Matrix Language=母体言語) を SFL の3層のメタ機能の面からも再定義をすることが示唆された。上記の一連の発表で、国内外のバイリンガリズム、CS の研究者、SFL の研究者などと意見を交わし、Systemic Functional Linguistics を用いた分析方法をさらに進める方針を固めた。

(3) 国内で研究者が少ないバイリンガリズム研究の裾野を広げる、という目的で、2009年に「第1言語としてのバイリンガリズム研究会」を立ち上げ、それ以来事務局長を務めてきたが、毎年2回の研究会、2回学生・院生による合同ゼミなどを主催し、バイリンガリズムやコードスイッチングの研究者の育成に努めてきた。

2012年の IJBE の記事、2014年の AILA での発表なども、この研究会のグループメンバーの共同作業から実現したものであるが、当研究を通して得られた知見を、国内の他の研究者、教員、学生たちに広く知ってもらう目的で、書籍「バイリンガリズム入門」を共同執筆した。その中で、社会とバイリンガリズム、バイカルチュラリズム、コードスイッチングなどの章の執筆を行ったが、当研究から得られた知見をわかりやすい言葉で説明することに務めた。

SFL を CS の分析に用いるという新たな研究方法も、この第1言語としてのバイリンガリズム研究会のメンバーの大学院生によって実施され、修士論文という形で発表をされた。

(4) 研究開始当初は、ケーススタディで収集された自然な会話データ全ての書き起こしを目標として設定したが、日本語と英語、さらにコードスイッチングが入った会話の書き起こしができる人材を探すのが困難で、書き起こした縦断的データは、5年間のうちの22回分で、通時的な観点から、日英バイリンガル児の変化を見るという目的については、研究途中である。この22回分の縦断的データと、10回分の国際高校生の横断的データについて、文法構造だけでなく、語用論、談話機能などについても、同じフレームワークの中で分析をできる SFL を実際に用いた分析を行い、学会発表、ジャーナルへの投稿をすることができた。

コードスイッチング研究は、社会言語学的な面からの研究と、文法構造的な面からの研究に大きく分かれているが、本研究では、その二つの橋渡しになる可能性のある SFL を使った初めての研究であり、日本語-英語という言語類型学的に離れた言語間の現象であることもあり、この分野に新たな一石を投じることができたと考えられる。

SFL は interpersonal, textual, experiential の3層の機能についてみるのが、その特徴となっており、これまでに行った interpersonal function (対人的機能)、textual function (テキスト形成的機能面) からの分析に加えて、今後 experiential function (経験的意味機能) の面からの分析も行い、統合されたかたちで SFL をコードスイッチングの分析のツールとして、使っていくことが必要と考えられる。日本語を SFL で分析する研究も進み (Teruya 2007 など)、日英コードスイッチングの研究に活かせるようになってきた。研究途中である通時的な面での研究に関しても、SFL の3つの

メタ機能の面から今後分析をしていく予定である。

#### References

Azuma, S. (1993). The frame-content hypothesis is speech production : evidence from intrasentential code switching. *Linguistics*, 31: 1071-1093.

Halliday, M. A. K. & Matthiessen, M.I.M. (2013).

Fourth edition. London: Routledge.

Muysken, P. (2000). Cambridge : Cambridge University Press.

Myers-Scotton, C. (2002). Oxford ;

New York: Oxford University Press.

Namba, K. (2008). *English-Japanese Bilingual Children's Code-switching: A Structural Approach with Emphasis on Formulaic Language*. Centre for Language and Communication Research, Cardiff University, Cardiff.

Namba, K. (2009). A continuum-based model for insertional code-switching: Japanese nominal insertions in English Matrix language frames. *Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism*. 15 (1):18-40

Nishimura, M. (1997). *Japanese/English Code-Switching: syntax and pragmatics*. New York: Peter Lang.

Takagi, M. (2000). *Variability and Regularity in Code-switching Patterns of Japanese/English Bilingual Children*. Unpublished PhD thesis, University of Newcastle upon Tyne.

Teruya, K. (2007). *A Systemic Functional Grammar of Japanese*. London : Continuum.

Wray, A. (2002). *Formulaic Language and the Lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press.

#### 5 . 主な発表論文等

( 研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線 )

[ 雑誌論文 ] ( 計 3 件 )

(1) 難波 和彦 (2015) 対人的メタ機能とテキスト形式的メタ機能の観点からの日英コードスイッチングの分析 *Proceedings of JASFL* 9 : 15-23 ( 査読有 )

(2) Hideyuki TAURA, Satomi MISHINA-MORI, Kazuhiko NAMBA, Yukio IKARI ( 2015 ) Bilingualism as a First Language in the Japanese Context. 『立命館言語文化研究』 26:14-19 ( 査読有 )

(3) Namba, K. (2012). Non-insertional code-switching in English-Japanese bilingual children: alternation and congruent lexicalisation, *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 15.4: 455-473. DOI:10.1080/13670050.2012.665829 ( 査読有 )

[ 学会発表 ] ( 計 5 件 )

(1) 難波 和彦 対人的メタ機能とテキスト形式的メタ機能の観点からの日英コードスイッチングの分析. 第22回日本機能言語学会. 2014年10月11日. 龍谷大学大阪梅田キャンパス (大阪府・大阪市)

(2) Kazuhiko Namba *Balanced Bilinguals' Code-switching using Systemic Functional Grammar*. AILA(International Association of Applied Linguistics) World Congress 2014. (2014/08/12). The Brisbane Convention and Exhibition Centre, Australia.

(3) Namba, K. *A Systemic Functional Approach to Japanese-English Code-switching*. 9<sup>th</sup> International Symposium on Bilingualism. 2013/06/13. Nanyang Technological University, Singapore

(4) 難波 和彦 *An Analysis of Japanese-English Code-switching Data*. 第1言語としてのバイリンガリズム研究会-第5回研究会. 2011/10/22. 大阪市立大学梅田サテライト (大阪府・大阪市)

(5) Namba, K. *Alternational Code-switching in English-Japanese bilingual children: a multidisciplinary approach*. 8<sup>th</sup> International Symposium on Bilingualism. 2011/6/18. University of Oslo, Norway.

[ 図書 ] ( 計 2 件 )

(1) 山本雅代 ( 編著 ) 井狩幸男 ( 著 ) 田浦秀幸 ( 著 ) 難波 和彦 ( 著 ) (2014) *バイリンガリズム入門* (pp97-111, 115-133, 191-220, 221-224) 東京: 大修館書店. (244p)

(2) Namba, K. (2012). *English-Japanese Code-switching and Formulaic Language: A Structural Approach to Bilingual Children's Interactions*. Saarbrücken: Lambert Academic Publishing. (292p)

#### 6 . 研究組織

(1) 研究代表者

難波 和彦 ( NAMBA, Kazuhiko )  
京都産業大学・外国語学部・教授  
研究者番号 : 10550585

(4) 研究協力者

中川原 理沙 ( NAKAGAWARA, Risa )  
長澤 ケーティ都 ( NAGASAWA, Katy Miyako )  
土居 可弥 ( DOI, Kaya )